

『源氏物語』薰造型の方法―「宿木」巻を中心に―

呉羽 長

富山大学人文学部紀要第55号抜刷
2011年8月

『源氏物語』薫造型の方法―「宿木」巻を中心に―

呉羽 長

はじめに 柏木から薫へ

前稿で私は「御法」「幻」両巻における光源氏及び紫上に対する語り手の一体化の表現に着目して、死を前にした紫上の、源氏以下残される人々への情愛（「御法」巻）、そして紫上を悼む源氏の姿（「幻」巻）を辿り、そこに見られる心的一体化の表現に作者の源氏・紫上への共感を読み取る立場から、この二人をめぐって一つの愛の物語を完成させようとする作者の意図を導き、更に源氏が紫上の死による心の乱れを静め出家のための穏やかな心を取り戻すための時間を確保しようとする姿を、物語執筆の意志として読みとることができることを示した¹。

右のように捉える場合、これまでに指摘されてきたような、源氏が自らの生涯の閉じ目に類ない憂愁を抱きななお迷いをもって後世への立ち出でに佇立する姿から続篇における救済の問題の追求を薫に託す、という直接的な主題継承の図式を読みとることは、作者の創作意図という観点からはなお考慮の余地が残る。こうした源氏の迷いの姿は、「御法」巻で紫上が死を現実的なものと見て恐れる姿²とともに、作者の意図せざるところで、彼女自身の心の内より発し、物語の進展の中で露わになったものと解すべきであると考ええる。作者の創作意図と、彼女の内切実なものとなりつつあった救済の問題の意図せざるレベルでの作用という相関の中で物語の主題性は追究されるべきだが、それでは、作者の意図として完結性をもった「幻」巻のあとに続篇の巻々の綴られることの意味はどのような

ころにあるのか。

「匂兵部卿」巻では、「匂ふ兵部卿、薫中将」と匂宮と薫とが併称され、この二人が交互に語られる形態をもつことから、両者による主題形成が求められたと考えられる。そのうち薫の生の課題という点について考えるならば、「若菜」上巻以来の柏木の生のあり方からそれが導かれたとするのが妥当であろう。

「柏木」巻で、病づいた柏木は女三宮に今一度あはれの共感を得たいと願って「あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ」（「柏木」巻二九一ページ）と訴える文を送る。こうした宮からの「あはれ」の共感を死後の闇の道的光にもしようという柏木の心について、「愛憐の情を断ち切るのが仏の救済を得る道だとする当時の考え方とは逆である」⁴とする注解があり、仏による現世離脱の思いは読み取ることができない。柏木が密通以来繰り返し女三宮に「あはれ」を求めてきたところに窺える並々ならぬ執着心は、続く柏木の病治療のために催された加持祈祷の場面で、自分にとり憑く靈にまで女三宮のそれであることを期待している（二九四ページ）ことから読み取れ、また、女三宮からの返書に対しても柏木のそれは表れている。女三宮の返書は、自らの苦しさや柏木の理不尽な行為に対する恨みを含むものであったが、それを柏木は宮から自分に寄せられた「あはれ」であると一方的に思い込み、更に強い女三宮への執着を訴える返歌に添えて、「かひなきあはれをだにも絶えずかけさせたまへ」（「柏木」巻二九七ページ）という、遺言とも取れる言葉を彼女に残すのである。女三宮への異常なまでの執着心が、彼をこのようなふるまいに導いたと考えられる。このような柏木の、仏も神も必要とせず執着の中に迷いその生を閉じる無念を慰藉し更に転回するため薫は要請され、それが匂宮に託されたものと絡ませられたといえるではないか。

「匂兵部卿」巻における薫の特異性について伊藤博氏は「その道心が元服以前幼少期に遡って設定されている」点を指摘され、「この疑惑と不安をだれに質すべくもないままに心内で反芻する過程で、だれに理解されるべくもない孤独感・疎外感を内向させてゆく」と述べられる。その姿には、前述のような柏木の執着を受けての、第二部から継承されるべき課題の追究の方向を見ることができ、薫は出生をめぐる暗い陰を背負い、「いかなりけることには。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」（二三三ページ）と独言する。彼は、

香のかうばしきぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。(二六ページ)

とあり、優れた道心者たる資質を持つ人として描かれるが、その記述の直前で、彼の容姿について、

顔容貌も、そこはかと、いづこなむすくれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしう恥づかしげに、心の奥多かりげなるけはひの人に似ぬなりけり。(二六ページ)

と描写されている。三枝秀彰氏はこの記述について、それが第二部における薫の「ゆゆし」「光り」といった超越的美質に対し容貌に關して完全に匂宮の下に位置づけられていることから、そのくい違いは作者の必然が要請したものであることを指摘した上、「薫とは、自己の根底に柏木の影を抱え込み、生き方にまでそれを刻み込まれて、それ故に愛執に引き込まれ、また規制される存在であつた」とされる。氏の指摘などを勘案して、薫は恋の風流な演技者とは別に、かつて宗教的な救済から見放された柏木をめぐる問題を繼承しその魂の救済を意図して造型が求められたのではないかと考える。

「匂兵部卿」巻においては、匂宮と薫による主題展開が当初の意図としてあつたことが推定されるが、それが「紅梅」「竹川」両巻それぞれ展開の中断を経て、「橋姫」巻以降、匂宮は薫に誘導されるだけの存在として終始し、薫と大君に焦点が定められていく。これらの巻での大君の結婚拒否に注目して宇治の物語を女の物語とする指摘もなされるところであるが、対置される薫の結婚に対する姿勢等も併せ論じなければならぬ。この点から、本稿では薫の造型をめぐって、特徴的と思われる点を指摘し、その方法的特質を捉えることとしたい。

一 薫における聖性と俗性の関係性

薫は「匂兵部卿」巻で、「なにの契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけむ。」(前掲、二二三ページ)と自らの出生に疑問をもつが、その疑問は、女三宮の姿を見る際の不審と絡んで自らの生き方を規定するものになっている。薫は女三宮がまだ若く

して尼姿となり、しかし道心の深さは見られないことから、彼女を出家へと促す秘された出来事があつたのではないかと思ひやる。

事にふれて、わが身につつがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく思はずなりける事の乱れに、かならずうしと思しなるふしありけん、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべき事の聞こえにより、我には気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。(「句兵部卿」巻二四ページ)

そして女三宮の明け暮れの勤行の態度が悟りにほど遠く危うさが感じられることから、彼女を後世に導くことを思う。

明け暮れ勤めたまふやうなめれど、はかもなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはむことも難し、五つの何がしもなほうしろめたきを、我、この御心地を、同じうは後の世をだに、と思ふ。(同巻二四ページ)

その、後世への導きは、宮に「ことのけしきにても知りけりとおぼされむ、かたはらいたき筋」と思う故に、積極的に彼女を悟りに向かうよう促すことはなく、後見を全うすることに限られている。薫は

「宮のおはしまさむ世のかぎりは、朝夕に御目離れず御覽せられ、見えたてまつらむをだに」と思ひのたまへば、(以下略)(同巻三二ページ)

とあるよう、宮を残して出家しようとは考えない。

女三宮も、この後「宿木」巻において、自分が世にある限りは出家はしてくれぬなと薫に訴えており、そうした願いは当初からのものであったと推測できる。

「幾世しもあらじを、見たてまつらむほどは、なほかひあるさまにて見えたまへ。世の中を思ひ棄てたまはんをも、かかるかたちにては、妨げきこゆべきにもあらぬを、この世の言ふかひなき心地すべき心まどひに、いとど罪や得んとおぼゆる」とのたまふが、かたじけなくいとほしくて、よろづを思ひ消ちつつ、御前にてはもの思ひなきさまをつくりたまふ。(「宿木」巻四〇〇ページ)

薫は女三宮の訴えを受けて出家への思いを抑えている。実際薫が宮の皇女としての生活や立場を支えていたことは、「宿木」巻で彼の宮後見をめぐる帝の感想に次のようにあることからわかる。

源中納言の人よりことなるありさまにてかくよろづを後見たてまつるにこそ、その昔の御おぼえ衰へず、やんごとなきさまにてはながらへたまふめれ、さらずば、御心より外なることどもも出で来て、おのづから人に軽められたまふこともやあまし（三七六—三七七ページ）

このように、薫は女三宮を残して一人出家すると却つて俗世に残ると考え、なお俗姿のまま彼女の後見を続けていこうとしていたのであり、将来女三宮というほだしが無くなった時、いつでも出家できる心構えを持って、俗事と関わろうとする。それが薫に許された現世に生きる姿であった。

薫の中でほだしが無くなるまで、つまり女三宮の死までという、限定の中で世俗と関わるといふことは、薫がそこで恋も出来れば政治的栄達も許されることである。ただし女三宮が死を迎えたとき、それらを全て捨てて仏道へ向かわなければならぬ。そのような制限を負つて生を演ずることが薫の俗世でのあり方の実態であり、そうした条件を背負う故に彼は現世に執をとどめないように努めていた。

女君たちとの関わりについても、母宮の存生の限りという条件を付して本来彼の内で相合わないはずの求道心と併存させようとしていた。

「大君・中君・浮舟に対して愛を自覚するとき、薫の中で愛と道心の葛藤は全くといつていいほど起こっていない。」とは菊田茂男氏の指摘であるが、更に氏は次のように述べられている。

「はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごと世の常なきなり。我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かは、と思ひつづけらるる薫の観想は、自らの道心の没個性的側面を露呈するものに外ならない。「法の友」としての八の宮に、薫は、「俗聖」の幻影を憧憬し続けていたのである。「橋姫」巻の世界が、求道と愛執の対立・葛藤の生々しい様相を展開するのではなく、むしろこの二項関係が併存的、調和的に緩やかに進行するのは、右のような薫の道心と愛の特性に基づく並行的構想によるものだからなのであらう。」

菊田氏が指摘されるように、薫において道心と愛は葛藤し止揚されてより高次元の道心なり愛の認識なりに変わるといふものではなく、両者は無葛藤のまま終始するものであった。

以上のように、薫の道心については、彼を女三宮の死の後出家へと抵抗なく促すことが求められ、それまでの間恋を含めた俗事との関わりも許されることを述べてきた。その故に薫の言動について前後相矛盾が見られ彼独特の、恋を含めた俗事と関わる姿が作り出される。

例えば、①薫は自らの出生にまつわる秘密を弁の尼から知らされたとき、「かく、言ひ伝ふるたくひやまたもあらむ」(「橋姫」巻一六〇ページ)と他者の外聞を恐れ、弁に対しても口固めしている。彼は自らの出生の秘密を自己の世俗的安泰、源氏と女三宮の間の子という境遇に由来する社会的殊遇を保つために隠蔽することに腐心し、そのために大君と懇ろになろうとする。その世俗的姿は、しかし薫にとっては彼の中で容認されるべきものであった。ここで出生の秘密を隠して大君を薫の妻にして社会的立場を維持しようとすることは女三宮の生きている間という時限的なものであり、また大君との関係は限定的な恋の枠内でのことにすぎない。そのような限定性を自覚しつつ、薫は大君との関係を求めようとするのである。薫の求める関係のありようは、「総角」巻で、弁の君を介して大君へ求婚する際の言葉に、

ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはんなん、(中略)疎かるまじく頼みきこゆる。(二三〇ページ)

とあるように、「定めなき世」への共感を確かめ語れる間柄というものであった。そして右の弁との語らいの後、薫は大君に直接対面して二人で一夜を明かして大君と歌を交わす際にも、

かたみに、いと艶なるさま容貌どもを、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぎさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば、(二三七〜二三八ページ)

とあり、彼女に深い交際を求めている。「薫が大君に求めたものは、「つれづれとのみ過ぐしはべる世の物語も、聞こえさせどころに頼みきこえさせ」ること、つまり話し相手としての存在だったのである。」とする指摘のとおり、世のはかなさを話し合う相手として大君を求めるものであった。二人の仲らしいは、薫に出家への心を維持させることが前提に求められていた。女三宮の死によって仏の道へ赴く時まで大君と落ち着いた語らいをしながら俗の人生を歩むことが薫の考える大君との結婚生活のありようであったといえる。

②「匂宮」巻で薫は「なほざりの通い所」(三一ページ)をあまた持つてゐることに肯定的に書かれている。そうした侍女クラスの女性との交渉については、「人のためにことごとしくなだもてなまず、いとよく紛らはし、そこはかたなく情ならぬほどのなかなか心やましきを、思ひよれる人は、いざなわれつつ、三条宮に参り集まるはあまたあり。」(三一ページ)とあり、大げさに妻妾として扱ふことはない。清水好子氏はこの点について「彼女達は薫に対しては社会的な重みはもち得ない。従つてその様な関係は薫が此の世での身の処し方を考える時、問題として浮び上つて来る力がない。作者は薫の精神的な方向を示す為に仏教というものを考えているが、それは侍女との関係を包括して薫をゆるがす様なものではない。」と述べられる¹⁰。侍女たちが薫の精神に波紋を与えることがないのは、氏の右の指摘に加え薫の消極性に由来するものであろう。三条宮に引き取つた侍女たちとの関わりをめぐつては、「宿木」巻で薫に自らの姿を顧みる記述がある。薫は彼女たちを引き取り「け近く使ひならし」ていたが、宇治姉妹にも劣らぬ筋目のそのような女性たちにも心留まることがない。「今はと世を通れ背き離れんとき、この人をこそと、とりたてて心とまる絆になるばかりのことはなくて過ぐしてん」(三八九ページ)と思う故である。

③また、「宿木」巻で、薫が今上女二宮降嫁を受け入れることが記されているが、この降嫁は、帝の意に従う受動的なもので、女二宮を深く求めてのものではない(三八八ページ)。薫はほだしが無くなつたとき出家できる心を持続させようとする意識は、女二宮との関係においても生動しているといえる。また遡つて、この降嫁の話が出た直後、

ことさらに心を尽くす人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしもとおぼゆる心の中ぞ、あまりおほけなかりける。
(二七九ページ)

と、女二宮に殊更惹かれることはないものの、后腹の皇女を求めるところには社会的な野心も窺えるところであるが、しかしこれも出家するまでの限定の中で許されるという認識の下での行動といえる。

このように見てくると、薫は現世のほだしが無くなつたときいつでも出家できる心を維持しようとしており、彼の俗事との関わりはその出家への心を持続と併行する形で、許容されるものとして考えられていた。こうして薫は現世厭離の心を維持して俗情を抑制しつつ、女君たちと距離を置いた限定的な交際をしていくのである。そしてそこに現れる薫の男性としての魅力を物語は跡づけている。彼

は将来の自らの出離に抵触しないよう重い恋はしなかつてもりていたところ、大君に惹かれ彼女との結婚を願うが頑なな拒否にあう。薫は「総角」巻で大君に直接行動に訴えようとした際、彼女の許しがないことから実事に至ることがなかった¹²。そして大君との更なる恋の進展の中で彼女に執着する思いを強め、彼女の死の衝撃による懊悩の大きさは、彼に現世厭離の思いを維持させることを不可能にする。それはほだしが消えるという事態に直面したとき截然と出家することができないほどの心の乱れが現出したことであつた。秋山虔氏は薫と大君の交渉を辿つた上で、「いわば、薫にとつて大君という人は、その魂の奥底に宿る根源的郷愁の人となつていたのであつた」とされる¹³。そして大君恋慕が叶わず肥大化した彼女非在の心の乱れを緩和しあたかも郷愁の本源となつた大君と同様の語り合いの相手としてゆかりの人中君に求め、更にいつでも出家できる心境、つまりこの世に執を残さない状態に心を維持するため、大君の「人形」として浮舟が求められることになる。

このような薫の、恋を含めた俗事の捉え方、そして後世志向である故、彼は自分では道心深い人という自己把握を堅持する。

吉岡曠氏は、薫の道心が、ある場合には手段であり、ある場合にはアクセサリーであり、それ以上のもではなかつたとし、一方で、薫の道心が一種の擬態にすぎなかつたとしても、薫自身はそれを擬態とは意識していなかつたであろう、とした上で、

そういう薫を八の宮をはじめとする周囲の世間が素直に受け入れたのも、薫自身がまっさきに道心という幻影にたぶらかされてきたからにはかなるまい。薫自身の主観に即して言えば、あくまでも「心の中は聖」なのである。

と述べられる。そこから、

このことは薫が自分でかくありと思う薫と本当の薫とが分裂していたことを意味している。自分でかくありと思う薫とは要するに自己についての薫の観念であり、薫は一生この観念にとりつかれて現実の自分を見失つていた。同様のことが外界の現実に対してもおこなわれるとどういうことになるか。現実の大君ではなく観念の大君を愛する、現実の中の君や浮舟の上に大君の幻影を求め、薫の愛の形がそれである。

と、自己把握の観念性を指摘される¹⁴。薫の観念性は自らの設定した枠の中で俗心を制御できると考えたことに発するもので、一人の女性との恋に深く入り込むとき、その枠が崩れることに気づかないことによるものであつた。

そのような薫が大君亡き後、中君と関わりつつ新たな姿を見せる。薫をめぐって物語はどう進展していくのか。「宿木」巻について見ていく。

二 「宿木」巻の構想と薫像

「宿木」巻の冒頭、今上帝が藤壺女御の他界により残された女二宮の行く末に腐心する様が語られ、帝は宮の降嫁の相手として薫に注目し彼に働きかけを行う。そしてそのことを伝え聞いた夕霧が娘の六君を匂宮にと懇望し二人の婚儀に向けての話が進められる。このような「宿木」巻冒頭の展開については、池田亀鑑氏が「すべて筋の主体を明らかにし、源氏の世継としての薫の君の物語として、多岐にわたらうとする叙述を収束し、整理し、統合して、新しい局面を展開しようとしていることが、明らかに看取されるのである¹⁴。」として薫を中心にした物語の新しい展開を読み取られ、一方大朝雄二氏は、池田氏の述べられるような薫一人をめぐる筋立の整理という点にとどまらず、この巻が薫の縁談をもつて匂宮の婚儀を語るために展開する点に注目し、「匂兵部卿」巻で提示されていた匂宮と薫二人を主役とする構想が物語実態となったものと捉えられる¹⁵。大朝氏の指摘される匂宮と薫二人による新しい展開という点も「宿木」巻に認められるところであるが、橋姫三帖を経過して作り出された主題性という点から、特に薫に重点が置かれて局面が導かれ、薫と中君との関わりが深められていくという見方も否定できないのではないかと考える。その薫について、「宿木」巻ではこれまでの姿に変化を見ることができ、その変化に注目して巻の構想を見ていきたい。

薫は、匂宮と夕霧六君の婚儀のことを伝え聞き、中君の苦衷を思い遣る時、かつて大君の勧めどおり中君を妻にしなかったことを悔やみ、その悔恨から更に中君に心が向けられていく。

・あいなしや、わが心よ、何しに譲りきこえけん、昔の人に心をしめてし後、おほかたの世をも思ひ離れてすみはてたりし方の心も濁りそめにしかば、ただかの御事をのみとぎまかうぎまには思ひながら、さすがに人の心ゆるされてあらむことは、はじめより思ひし本意なかるべしと憚りつつ、ただいかにして、すこしもあはれと思はれて、うちとけたまへらん気色をも見んと、行く先のあ

らましごとのみ思ひつづけしに、人は同じ心にもあらずもてなして、さすがにひとかたにもえさし放つまじく思ひたまへる慰めに、同じ身ぞと言ひなして、本意ならぬ方におもむけたまひしがねたく恨めしかりしかば、まづその心おきてを違へんとて、急ぎせしわざぞかし、など、あながちに女々しくもの狂ほしく率て歩きたばかりきこえしほど、思ひ出づるも、いとけしからざりける心かな、とかへすがへすぞ悔しき。(三八七ページ)

・かの人をむなしく見なしきこえたまうてし後思ふには、帝の御むすめを賜んと思ほしおきつるもうれしくもあらず、この君を見ましかばとおぼゆる心の月日にそへてまさるも、ただ、かの御ゆかりと思ふに、思ひ離れがたきぞかし、(二三八ページ)

右に見るように、大君が自分と「同じ身」であるとして中君に心向けるよう訴えていたことを無にしたことを悔やむ思いが「早蕨」巻以来募り、中君を大君のゆかりとする意識が強まり彼女への傾斜を大きくしていく。ここには、中君について、

実はこれまで二人は対照的に描き分けられることが多かったのに、二人の相似がまず周囲の人たちの視点からきわめて自然に取り上げられ、やがて薫の眼に、中君の「いみじくものあはれと思ひたまへるけはひ」が、大君に「いとようおぼえたまへる」と映り、このことも折あるごとにたしかめられていく。¹⁶

とあるように、その姿が大君に似ている点と併せて、物語の進む方向が示唆されているといえる。

また、この巻では前述のように、薫が女二宮を正室に迎えるという出来事が語られるが、そこで薫は亡き大君を思いながら「さすがにえもて離るまじき心なめりかし」(四一七〜四一八ページ)と宮に興味をもち、婚儀の後にも、うちとけて女二宮を見て、その容姿に不足がなく、「宿世のほど口惜しからざりけり」と、女二宮を得て社会的重みを増すことに満足している(四八六ページ)。そうした記述には、中君への恋心が昂じていく姿とともに、俗事に積極的に関わるといふ新しい様相を薫に与え、一旦その道心の維持・深化ということから目を離そうとする意図を窺うことができる。こうした薫像をもって物語はどのような方向に進もうとするのか。ここで、薫が勾宮の六君との婚儀で中君が苦しんでいることを察して中君の住む二条院に出かけようとする際の描写を見ると、彼について語り手がその魅力を語り出そうとしている点が注目される。

出でたまふままに、下りて花の中にまじりたまへるさま、ことさらに艶だち色めきてももてなしたまはねど、あやしく、ただうち

見るになまめかしく、恥づかしげにて、いみじく気色だつ色好みどもに、なすらふべくもあらず、おのづからをかしくぞ見えたまひける。朝顔を引き寄せたまへる、露いたくこぼる。

「今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見る

はかな」と独りごちて、折りて持たまへり。女郎花をば見過ぎてぞ出で給ひぬる。(三九一ページ)

ここには世の色好みたちとは異なり、「なまめかしく恥づかしげ」な美しさを見せる貴公子としての薫が描き出されている。「おのづからをかしくぞ見えたまひける」という、係り結びを使った強調は、語り手の薫の優美さへの傾倒を示す。ここで薫のもつしめやかで上品な美しさは、中君との恋に入り込もうとする薫の資格としてのそれであるといつてよい。しかしそこには「女郎花をば見過ぎてぞ出で給ふぬる。」とあつて、あくまで「好きの人」に傾こうとはせず、その恋のあり方は抑制的である。そこには、本稿前節で述べたような、薫の内での恋をほだしが無くなるまでと限定しようとする意識の存続を認めることができる。このような姿を呈する薫を一旦中君との恋の中に入り込ませ、世の中の恋とは異なるものとして体験させることが意図されたのではないか。

「宿木」巻で求められたものは、大君の面影を心に宿しながら聖心の現れともいふべき自己抑制の心を保つ薫の、中君との間の独自の恋の展開であり、しかしその恋は成就(遂行)が見通されていない。右の場面の後、薫は中君に対面し、一旦はその場を辞したものの、奥ゆかしさが加わった中君への慕情が募る中で、匂宮の心が中君に離れたならば自分を頼りにするだろうと考えるが、そこから、薫自身中君との恋の限界を見通していると説める記述が続く。

何かは、この宮離れはてたまひなば、我を頼もし人にしたまふべきにこそはあめれ、さても、あらはれて心やすきさまにはえあらじを、忍びつつまた思ひます人なき心のとまりにてこそはあらめ、など、ただ、このことのみつとおぼゆるぞ、けしからぬ心なるや。さばかり心深げにさかしがりたまへど、男といふものの心憂かりけることよ(四三二ページ)

薫は中君との仲を「心のとまりにてこそはあらめ」と見るが、そこには双方の置かれた境涯から恋が進展し深まることに限界を感じていることが示されている。また薫が中君との恋に深入りせぬことは、この後薫が中君を訪ね彼女を前にして弁明する次の言葉の中にも窺える。

ただかばかりのほどにて、時々思ふ事をも聞こえさせうけたまはりなどして、隔てなくのたまひ通はむを、誰かは咎め出づべき。世の人に似ぬ心のほどは、皆人にもどかるまじくはべるを。なほ、うしろやすく、思したれ（四四七ページ）

こうした薫自身の見通しに加え、「何かは」の文章中の語り手の評について、中君に執心する薫の心を語り手が「など、ただ、このことのみ、つとおぼゆるぞ、怪しからぬ心なるや。」と評し、更に「さばかり心深げにさかしがりたまへど、男といふものの心憂かりけることよ」と評していることに注目したい。この草子地は、この場合の彼の中君への恋情がそれまでのさかしい聖心を装う姿とかけ離れていることを指摘し、一転、中君に恋慕を訴えていることを指弾して、深入りに向かう恋の方向を止めようとするものである。

この間の薫をめぐる叙述には、右の場面の草子地のほかに、批判的草子地が多用される。次の中君のもとを辞した後の薫をめぐる描写の中では、語り手が薫の中君恋慕に深く追随しつつも彼がその情を意のままに抑制できないことを難ずる言葉がみえる。

まだ宵と思ひつれど、暁近うなりにけるを、見咎むる人もやあらんとわづらはしきも、女の御ためのいとほしきぞかし。なやましげに聞きわたる御心地はことわりなりけり、いと恥づかしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しくおぼえてやみぬるかな、例のをこがましの心や、と思へど、情けなからむことはなほいと本意なかるべし、また、たちまちのわが心の乱れにまかせて、あながちなる心をつかひて後、心やすくしもはあらざらむものから、わりなく忍び歩かんほども心づくしに、女のかたがた思し乱れんことよ、など、さかしく思ふにせかれず、今の間も恋しきぞわりなかりける。さらに見ではえあるまじくおぼえたまふも、かへすがへすあやにくなる心なりや。（四二九〜四三〇ページ）

更に、中君の二条院に再訪した折、中君への思いを抑えられずにいる薫に対しては、

「胸なん痛き。しばしおさへて」とのたまふを聞きて、「胸はおさへたるはいと苦しくはべるものを」とうち嘆きてゐなほりたまふほど、げにぞ下やすからぬ。（四四五ページ）

とあり、彼が中君に強引に接近して介抱しようとする様子に邪な情を見て、指弾している。

このような草子地は、薫の悩みに語り手が追随しつつ、一方その好き心を彼が押さえ込むことの出来ない姿を批判的に捉えるものとして解することが出来る。そこには薫を中君との恋にあつて実事に向かわせまいとする働きかけが読み取れる。

およそ「宿木」巻は草子地（語り手の評言）の使用の多いことが指摘される巻であるが、その多くは匂宮Ⅱ六君の婚儀に発する中君の苦衷を語り出し、匂宮の愛情が中君に向けられるように作用するものであり、また一方で、見てきたような薫の中君恋慕を不当であるとするものがある。池田和臣氏は「宿木」巻の草子地のあり方について、「描写に支えられた局面が紡ぎ出す時間を、予定された筋立に従属させるべく採った方法」と意味づけられた上で、「描写機能が中君と薫の内面をほり起し、予定された物語の進行と異質なものを紡ぎ出す。そこで草子地がその危険的モチーフを晦まそうとする。」と述べられる。¹⁷ 物語が中君の生を薫の心理の必然に沿って推し進めようとするとき、一方それを掣肘する形で操作主体たる作者の意志が草子地に現れて、その不幸な事態への傾斜を止めようとする。池田氏はこのような中君の不安の深刻化の一方で匂宮の妻としての安定がはかられるなど、描写が物語の必然的進行を導くという物語時間の自立を抑制する「安全弁」というべきものの作用を指摘され、草子地をその一つに位置づけられている。¹⁸ 右に辿った草子地のあり方は、氏の指摘される物語の自律的進展を抑制する力として作用し、そのように物語を操作する作者の意識を表すものとして捉えられるが、ここでの作者の意志の内実とは、薫に中君との恋を体験させつつ当初付与された聖性をもつて俗を生きる形を維持させようとするそれであるとしておきたい。

「宿木」巻の薫の中君恋慕の姿から、彼と中君の間での密通の構想の存在が指摘される¹⁹ ところであるが、「宿木」巻の草子地が薫の俗心を指弾する一方で中君を擁護するものが多いことなど、そうした展開を抑制する操作がなされていることから、中君・匂宮の関係に薫が介入する事態が見られるものの、その究極で中君は三角関係から脱し幸い人になる方向で物語は構想され推し進められたとしてよいのではないか。

三 薫をめぐる草子地の一側面

見てきたように薫に対しては、中君への恋慕をめぐり彼女に対する「安全弁」の機能として、草子地による批判的な言辭が重ねられているが、そうした草子地の用いられ方の一方で、若宮五十日の日、二条院を訪れ初めて若宮を見る薫について、次のように記される

点は注目してよい。

ゆゆしきまで白くうつくしくて、たかやかに物語し、うち笑ひなどしたまふ顔を見るに、わがものにて見まほしくうらやましきも、世の思ひ離れがたくなりぬるにやあらむ。されど、言ふかひなくなりたまひにし人の、世の常のありさまにて、かやうならむ人もとどめおきたまへらましかばとのみおぼえて、このころ面だたしげなる御あたりに、いつしかなどは思ひよられぬこそ、あまりすべなき君の御心なめれ。かく女々しくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ、しかわるびかたほならん人を、帝のとりわき切に近づけて、睦びたまふべきにもあらしものを、まことしき方さまの御心おきてなどこそは、めやすくものしたまひけめとぞ推しはかるべき。

(四七九～四八〇ページ)

薫は「ゆゆしきまで白くうつくし」い匂宮と中君の間に生まれた皇子を見て、この子が大君と自分の間の子であつたらと思ひながら、女二宮との間に子生まれることを欲しない。その不可解とも言える心の内に対して、語り手は「あまりすべなき君の御心なめれ」と評したあと、しかしこの場の薫の心の内についてあれこれ批判することは「いとほし」きこととして、薫を擁護する言が述べられる。

玉上琢弥氏『評釈』ではこの件り、「かくめ々しく」から「とぞおしはかるべき」までは珍しく長い草子地である。」とした上で、

作者はあまりによわよわしい薫を語るのに気が引けたのであろうか。少々弁解している。／薫の実行力のあることはところどころで述べられている。(中略)／『源氏物語』は女の物語だから政治のことは書かない。薫だつてこんな得意でもない恋の橋渡しを上手にやっつてのけるのも、政治にだつて細かく気のつく人、実行力のある人のはずである。「め々しく、ねぢけて」と、一度はけなしておいて、改めてほめるのも作者の手だ。²⁰

とあり、『源氏物語』に一般的に見られる語りの手法として捉えている。

そもそもその擁護については、「薫の様体を今上の御覧し所ありてこそ御むこにはし給ふらん 実々しき方こそつよくおはすらんとをしはかるへしと也」と『岷江入楚』²¹「箋」にあり、また「以下、帝が女二の宮を薫に降嫁させた事実から、改めて薫のすぐれた人となりを考え直す。」²²とあつて、帝が皇女を降嫁させたことから、「まことしきかたさま」、つまり「ちゃんとした方面についてのお考

え」²³、「政治向きのこと」²⁴についてしっかりしていることで、非難には当たらないと説明するものである。つまり薫の心の動きに不可解さ・違和感を示しながら、その異常さを指弾せず彼のもつ他の美質によつて容認するもので、そこには語り手がより深いところで薫に同調するものがあることを示す。この語り手の擁護は、作者の彼への信頼の現れといつてよいものではないか。薫を優れた資質の人として信頼し、彼に主人公として寄り添い物語を薫中心に推し進めていこうとする作者の意志を示すものと思うのである。

榎本正純氏は「宿木」巻での中君について、「中君は作者紫式部の全き影響下にあり、中君と作者との〈同質性〉、その内的状況の緊密な結びつきが顕著に認められた。中君像は現実の作者紫式部自身の生の内面化にほかならなく、作者は物語世界の現実に根差した生を中君に辿らせたのだ」と述べられ、中君に「作者紫式部の中君によせるかぎりない〈情愛〉を見ようとされる」²⁵。物語を書き進めていくうちに、作者にとつての中君が紫上のように大切な存在にまで高められていったことが推測されるが、右の「ゆゆしきまで」以下の引用本文中の草子地に見られる語り手の口吻からは、同様に作者が薫に対しても心情的に寄り添い、その哀歎に共鳴しつつ物語を推し進めようとしている様子が窺えるのではないか。

結語

「宿木」巻は薫の中君への慕情を描きつつ、中君の匂宮妻としての地位を確かにする方向に進められた上、浮舟が紹介されその登場が導かれて終わる。この巻のはじめに中君に出産の兆候が見られることから、皇子誕生が予定されていたことは確かであろう。この間、あつてはならぬものとして薫の中君恋慕を掣肘し、しかし根底のところでは薫のもだえを理解することを示す表現として草子地が使用される。その草子地の作用に、作者の、薫の迷いに追隨しながら物語を進めようとする意識が窺える。薫の中君への恋慕の物語が終わろうとする時、新たに浮舟との関わりが構想される。薫は中君を前に、

音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなむ思つたまへなりにたる（四四八ページ）

と語っているが、こうして、宇治の山荘に大君の「人形」を本尊として置き仏道修行をしたい、との意志の表明から浮舟の紹介へと物語が進む。彼女の登場は、本稿第一節で述べた薫の道心と俗心の関係性、つまり女三宮というほだしのある間は俗世で限定的な恋を生きざるを得ず、そのために大君非在の悲しみを鎮静する必要があるという状況の上に、その鎮静を導くために「人形」として求められたものであった。こうして鎮められた心の状態に戻ることで、薫は、内に道心を維持しその道心をもって仏に近づくことが可能になる。そこには物語が一貫して薫に託そうとするものを堅持していることが読みとれる。また薫の求道の形を維持する軌跡の中で、作者自身の魂の救済の方途を探ろうとしたという事情も窺うことが出来るのではないか。そして、右の一貫する意図に沿って、浮舟と薫・匂宮の関係をめぐる新たな物語状況が作られるのである。

注

- 1 拙稿『源氏物語「御法」巻の主題性をめぐって―語り手の紫上との一体化の表現に着目して―』（『富山大学人文学部紀要』第五〇号、平成21（二〇〇九）・2）、『幻』巻における光源氏の現世執着と救済―語り手の源氏への一体化の表現に着目して―（『文藝研究』第一六八集、平成21（二〇〇九）・9）。なお、源氏・紫上をめぐって一つの愛の物語を完成させようとする作者の意図については、紫上葬送の折の源氏の服喪の色なども勘案すべきものと考ええる。
- 2 鈴木日出男氏「紫上の絶望」（『文学・語学』第四九号、昭和43（一九六八）・9）。
- 3 『源氏物語』の本文の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男の各氏校注・訳新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）に拠る。
- 4 3のテキストに付された頭注。
- 5 伊藤博氏「薫論序説―柏木の影をめぐって―」（『源氏物語の基底と創造』平成6（一九九四）・10、武蔵野書院）。
- 6 三枝秀彰氏「薫試論―その主題的に内実とするもの―」（『中古文学』第三五号、昭和60（一九八五）・5）。
- 7 大朝雄二氏「源氏物語・宿木巻論―続篇における「構想の継ぎ目」―」（『国語と国文学』昭和61（一九八六）・1、『源氏物語続篇の研究』平成3（一九九一）・10、桜楓社に収録）。
- 8 菊田茂男氏「橋姫三帖」の構想と方法―「薫についての物語」の始発をめぐって―」（宮城学院女子大学『日本文学ノート』第三三号、平成10（一九九八）・1）。
- 9 菊田茂男氏8に掲げた論文。
- 10 清水好子氏「薫創造」（『文学』昭和32（一九五七）・2）。

- 11 その理由について、伊藤博氏は「人為的後天的なものともみより、父の罪を負ったみずからへの怖れに根ざすものと見るべきだろう。」とされる（5に掲げた論文）が、前提的に見てきたように薫が自らに課す恋の消極性も考慮して良いのではないか。
- 12 秋山虔氏「薫大将の人間像」十二（『源氏物語の世界』昭和39（一九六四）・12、東京大学出版会）。
- 13 吉岡曠氏「薫の道心と愛はどうかかわるか」（『国文学』昭和55（一九八〇）・5）。
- 14 池田亀鑑氏「新講源氏物語」（昭和26（一九五二）・5、至文堂）下「宿木」。
- 15 大朝雄二氏「掲げた論文。氏は更に、「宿木巻は、正篇における「構想の継ぎ目」としての若菜巻をまるごとなぞることによって、新しい局面の展開を実現させようとしている、と考えられるのである。」とされ、ここに二人の主役による第三の密通事件（浮舟をめぐる事件）に展開する構想を讀みとられる。
- 16 木村正中氏「幸い人の物語―早蕨・宿木」（『国文学 解釈と教材の研究』昭和62（一九八七）・11）
- 17 池田和臣氏「浮舟登場の方法をめぐって―源氏物語による源氏物語取―」（『国語と国文学』昭和52（一九八七）・11、『源氏物語 表現構造と水脈』平成13（二〇〇一）・4、武蔵野書院に収録）。
- 18 「安全弁」とは、具体的には、①中君に産が予定されており、また彼女が匂宮・薫によって懊悩を体験する時、それに応ずるように出産の兆候が描かれる。②匂宮・薫が彼女の不幸を招くかみえるが、そうした折、彼らは常に彼女に行った仕打ちに深い反省・悔悟の念を抱いている。③物語が必然的秩序をもって進展しようとするとき、その筋を掣肘する意味で草子地が頻出し、物語をもとの流れに戻そうとするかみえる。④不幸の転化の対象として浮舟が準備されている。―などの点である。
- 19 吉岡廉氏「宇治十帖の構想」（『国語と国文学』昭和41（一九六六）・1、『源氏物語論』昭和47（一九七二）・12、笠間書院に収録）など。この構想について、吉岡氏は次のように述べられる。
- 現行の物語でも匂宮の婚姻前後に、中君は宇治行きのことをくり返し薫に頼んでいるが、薫の手引きでか、あるいは単独でか、ともかく中君は再び宇治の人となる。その後は匂宮と薫の役どころが現行の浮舟巻とは攻守所を代え、匂宮が守り薫が攻めることになるが、いずれにしても浮舟の置かれた状況とほぼ同じ状況の下で、入水の決意が固められる。
- 20 玉上琢弥氏『源氏物語評釈第十一巻』「宿木」。
- 21 『岷江入楚自四十三句兵部卿宮至五十五夢浮橋』（中野幸一氏編源氏物語古注釈叢刊第九卷平成二・九、武蔵野書院）。
- 22 3に掲げたテキスト当該箇所の頭注。
- 23 新潮日本古典集成『源氏物語』当該箇所の頭注。
- 24 3に掲げたテキスト当該箇所の頭注。
- 25 榎本正純氏「物語と家集―宇治十帖中君の再検討―」（『国語と国文学』昭和49（一九七四）・7）。